

牛出窯跡遺跡発掘調査報告書

平成9年度地方特定道路整備事業
市道牛出学校線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査

1998.3

中野市
中野市教育委員会

牛出窯跡遺跡発掘調査報告書

平成9年度地方特定道路整備事業
市道牛出学校線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査

1998.3

中野市
中野市教育委員会

刊行にあたって

本報告書は平成9年度市道牛出学校線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

中野市高丘地区には多くの遺跡が分布しており、上信越自動車道や県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査が実施され、多大な成果を納めたことは記憶に新しいところである。

調査の対象となった牛出窯跡遺跡は、高丘丘陵古窯址群として知られる県内有数の奈良・平安時代における須恵器生産拠点のひとつである。古くから須恵器窯の存在は知られており、先学諸氏による調査も行われていたが、本格的な発掘調査が行われ遺跡研究が始まったのは最近のことである。

調査地点は千曲川東岸に形成された高丘丘陵の西向き斜面に位置する。調査の結果、奈良・平安時代の須恵器窯5基、出土土器片多数という貴重な資料を得ることができた。

そして、本調査に先駆けて行われた上信越自動車道建設に伴う（財）長野県埋蔵文化財センターによる発掘調査と併せて、牛出窯跡遺跡に新たな知見を加えることができ、大きな成果を得ることができたと考える。

また、こうした埋蔵文化財が関係諸機関や市民の理解と協力により事前調査が実施され、その成果を報告書として上奏できることを誇りに思うとともに、関係各位に篤く感謝の意を表したい。

平成10年3月

中野市教育委員会

教育長 小林治己

例　　言

1. 本書は平成9年度地方特定道路整備事業市道牛出学校線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の調査報告書である。
2. 調査は中野市教育委員会が実施した。
3. 遺構図は1／60の縮尺とした。
4. 土器の実測図は1／3とした。
5. 発掘調査及び報告書の執筆は中野市教育委員会学芸員中島庄一と調査員関武が中心となって行った。

目 次

第1章 地 形	1
第1節 地 形	1
第2節 牛出窯跡遺跡の広がりと周辺遺跡	5
第2章 遺 構	6
第1節 遺物出土状況	6
第2節 窯 跡	6
1 第1号窯	6
2 第2号窯	8
3 第3号窯	11
4 第4号窯	11
5 第5号窯	13
第3節 溝	13
1 第1号溝	13
第3章 遺 物	14
第1節 器種分類	14
第2節 各 説	15
1 第1号窯出土土器	15
2 第2号窯出土土器	15
3 第3号窯出土土器	15
4 第4号窯出土土器	15
5 第5号窯出土土器	16
6 グリッド出土土器	16

図 版 目 次

第1図 遺跡の位置（1）	1
第2図 遺跡の位置（2）	2
第3図 高丘丘陵古窯址群窯跡分布図	3
第4図 牛出窯跡遺跡の広がり	4
第5図 調査区	5
第6図 窯の構造（模式図）	6
第7図 第1号窯	7
第8図 第1号窯遺物出土状況	8
第9図 第1号窯模式図	9
第10図 第2号窯模式図	9
第11図 第2号窯	10
第12図 第3・4・5号窯、第1号溝	12
第13図 器種分類表	14
第14図 第1・2号窯出土土器	18
第15図 第3号窯出土土器	19
第16図 第3・4号窯出土土器	20
第17図 第5号窯、グリッド出土土器	21
第18図 グリッド出土土器	22
第19図 遺物観察表	23

写真目次

- P L 1 千曲川対岸より調査区を望む
- P L 2 第2号窯 遺物出土状況
- P L 3 第2号窯 遺物出土状況
- P L 4 第2号窯
- P L 5 第1号窯 遺物出土状況
- P L 6 第1号窯 窯体残存状況
- P L 7 第1号窯 遺物出土状況
- P L 8 第1号窯（上方より）
- P L 9 第1号窯
- P L 10 第1号窯
- P L 11 手前より第5，3，4号窯
- P L 12 第3号窯 遺物出土状況
- P L 13 第3号窯
- P L 14 第4号窯
- P L 15 第5号窯 遺物出土状況
- P L 16 第5号窯
- P L 17 第1号溝

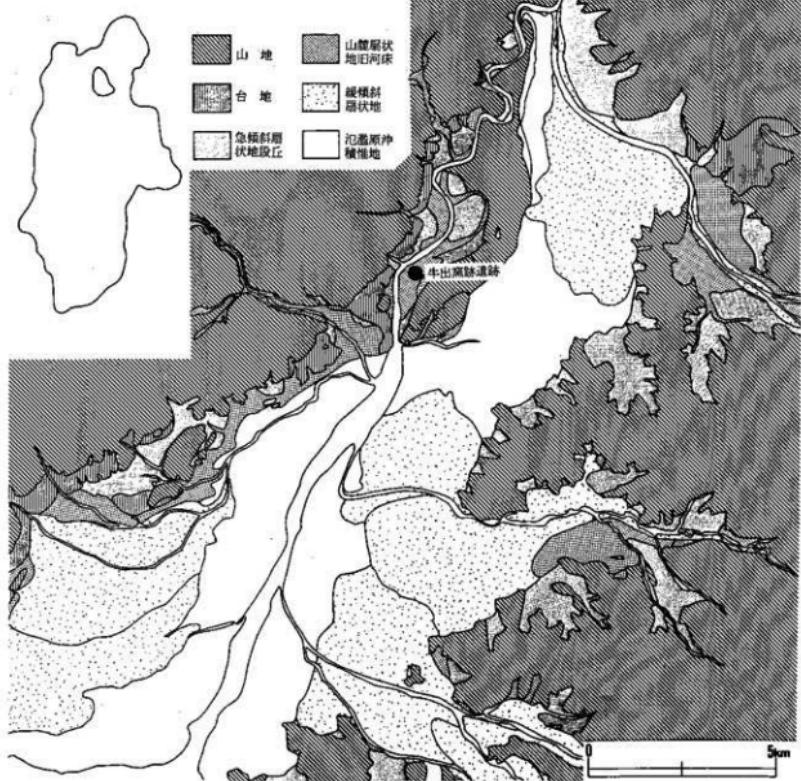
第1章 地 形

第1節 地 形

牛出窯跡遺跡は長野県中野市牛出地籍に所在する。長野盆地は南北30km、東西10kmに及ぶ広大な沖積平野をもち、中央部には千曲川が北流する。長野市南部で千曲川と犀川が合流し、新潟県境までを千曲川と称し、日本海に流入するまでを信濃川と称している。長野盆地は中野市付近で急速にその幅を收

束し、盆地のほぼ中央を北流してきた千曲川は盆地の北西を画する山地の裾部を嵌入蛇行しながら北流する。両岸には何段かの河岸段丘が形成され、嵌入により北西部の山地裾部は東西に分断され、東岸側は千曲川に沿って延びる細長い丘陵地形となる。

中野市は長野盆地の北端に位置し、盆地の東西を画する山地が狭まり、長野盆地が収束する部分にあたる。北に向かって収束する東西の山地地形、その山麓に形成された急峻な小扇状地、収束する山地間の沖積面全体を覆うように形成された扇状地（東側の山地から流れる河川による）、その扇状地の扇端



第1図 遺跡の位置（1）

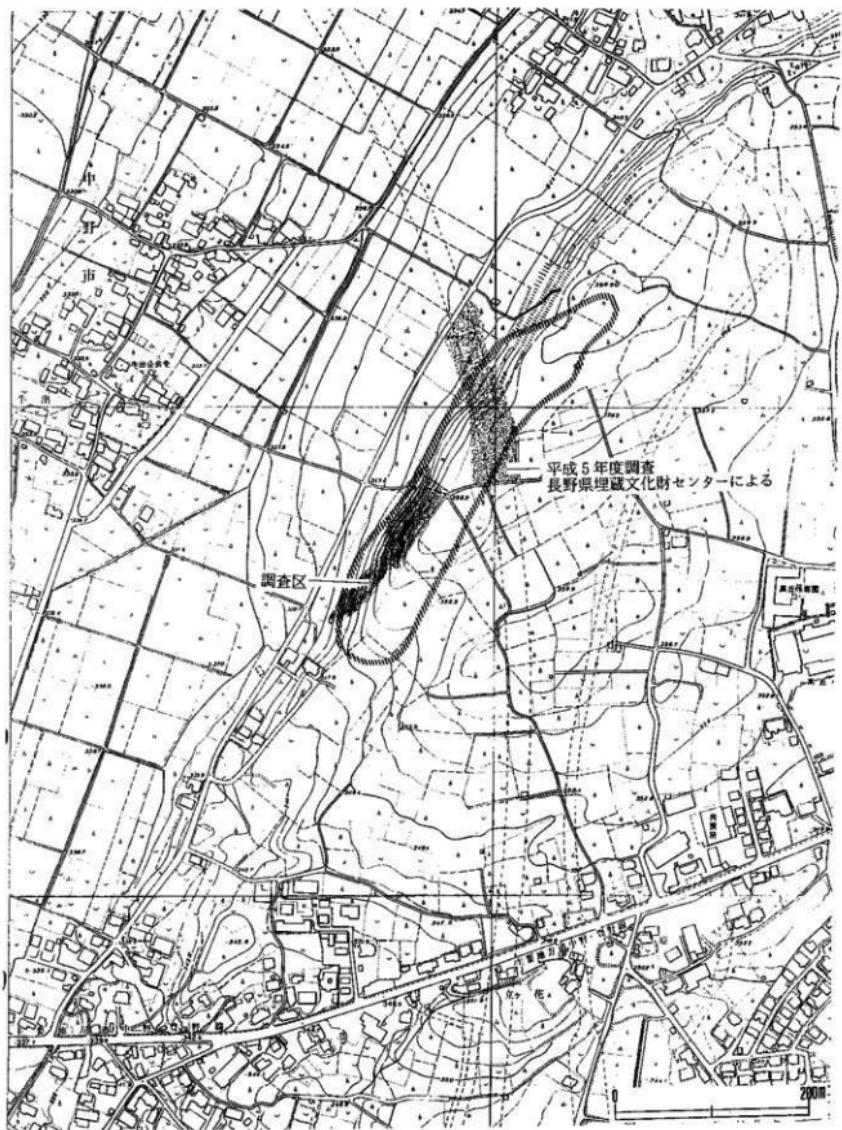


第2図 遺跡の位置（2）



- | | | | | |
|--------------|------------------|--------------|--------------|-----------------|
| 1: 立ヶ花表山 1号窯 | 2: 立ヶ花表山 2号窯 | 3: 立ヶ花表山 3号窯 | 4: 立ヶ花表山 4号窯 | 5: 沢田鍋土 1号灰原 |
| 6: 清水山 3号窯 | 7: 清水山 1号窯 | 8: 清水山 2号窯 | 9: 池田端 5号窯 | 10: 池田端 4号窯 |
| 11: 池田端 3号窯 | 12: 池田端 7号窯 | 13: 池田端 1号窯 | 14: 池田端 2号窯 | 15: 池田端 6号窯 |
| 16: 大久保 3号窯 | 17: 大久保 4号窯 | 18: 大久保 2号窯 | 19: 大久保 1号窯 | 20: 茶臼峯 4号窯 |
| 21: 茶臼峯 1号窯 | 22: 茶臼峯 2号窯 | 23: 茶臼峯 3号窯 | 24: 茶臼峯 7号窯 | 25: 茶臼峯 6号窯 |
| 26: 茶臼峯 5号窯 | 27: 沢田鍋土 1号窯 | 28: 沢田鍋土 2号窯 | 29: がまん窯 1号窯 | 30: 西山 1号窯 (仮称) |
| 31: 牛出 1号窯 | 32: 大久保 5号窯 (仮称) | 33: 上の山 1号窯 | 34: 安源寺 1号窯 | 35: 安源寺 2号窯 |
| 36: 中原窯跡 | | | | |

第3図 高丘丘陵古窯址群窯跡分布図



第4図 牛出蒸跡遺跡の広がり

を画するように南北に延びる丘陵（高丘・長丘丘陵）、扁状地の南側に位置し長野盆地に面する沖積低地（延徳冲）などから構成される。（第1図、遺跡の位置（1））

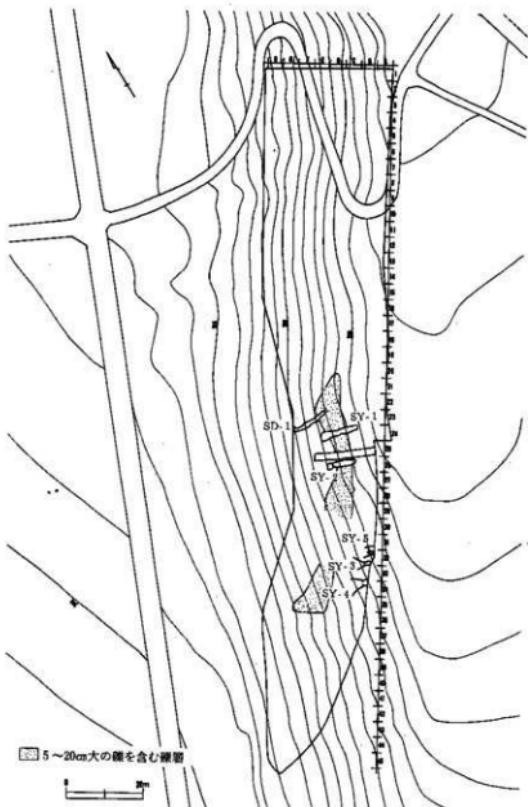
牛出窯跡遺跡はこの千曲川の東岸に形成された高丘・長丘丘陵の北西端の河岸段丘状の地形に立地する。この段丘上で幅約80m、南北約4.5kmの範囲が遺跡の範囲と考えられている。（第2図、遺跡の位置（2））

第2節 牛出窯跡遺跡の広がりと周辺遺跡

高丘丘陵における古窯址群の最初の報告は、大川清志・金井汲次氏による茶臼峯古窯址と大久保古窯址についての発掘調査報告（1964年）である。その後高丘丘陵の古窯址群が相次いで報告された。

茶臼峯古窯址群、がまん淵窯跡、沢田鍋土窯跡群、立ヶ花表山窯跡群、安源寺窯跡群、清水山窯跡群、大久保古窯跡群、池田端窯跡群、牛出古窯跡、中原古窯跡、上の山古窯跡、西山窯跡、林畔窯跡、東池田窯跡、坂下窯跡等、高丘丘陵古窯址群は約2kmの狭い範囲内に多くが発見されている。（第3図、高丘丘陵古窯址群窯跡分布図）

古くから河岸段丘の斜面に須恵器窯跡が存在することが知られていたが、上信越自動車道建設に伴う（財）長野県埋蔵文化財センターによる発掘調査が平成5年度に行われた。この発掘調査では、段丘上段の平坦面において旧石器時代石器、奈良・平安時代の住居址が、段丘下段の平坦面においては古墳時代初頭の集落跡と中世の墓が確認された。（第4図、牛出窯跡遺跡の広がり）



第5図 調査区

第2章 遺構

第1節 遺構配置状況

今回の調査で検出された遺構は窯5基、溝状遺構1であった。

このうち窯については二つの群に分類できそうであるが同時期に存在していたとは断定できない。

第2節 窯跡

1 第1号窯(SY-1)

位置

B～E24、25グリット内に位置する。今回検出された窯の中で一番北側に位置する。

方向

主軸は南東方向を向いている。等高線に直交する。

土層

①層は窯崩落後堆積した二次堆積層。

②a、b層、③層は窯崩落後に堆積した層。

②d、e層、⑤a、b層は窯崩落時から崩落後にかけての堆積層

⑤c、⑥層は窯崩落前から窯崩落時にかけての堆積層

⑦層は窯築造時から④層の粘土がひかれるまでの間に堆積した層

④層は粘土状の土で窯の構造物と見られる。

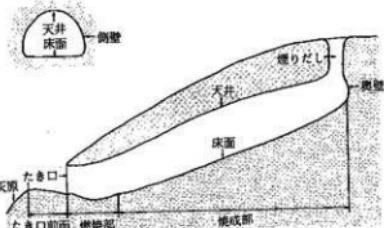
構造

奥壁を含む上方は消失している。窯の残存する全長は728cmを測る。半地下式で無階段である。断面は船底状を呈する。

たき口前面

平面形態はほぼ円形を呈している。底面は横・縦方向共に緩やかなへこみ状を呈している。下側端部の中央点線部分は、幅1mにわたって自然傾斜とほぼ同傾斜を呈している。

大きさは全長200cm、最大幅260cmを測る。



第6図 窯の構造 (模式図)

焼成部

平面形態 外殻はたき口部分は八の字形に広く開いている。上方へ行くにつれ狭くなり途中から一定幅になっている。内殻はたき口部分は外殻と同じようになっている。狭くなる部分は外殻に比べ、上方で急激に狭くなっている。更に上側で広がる様相を見せる。底面には船底ビットの落ち込みが見られる。

底部状況 たき口前と接する所は緩やかに盛り上がる。たき口部から奥へ120cmほどは平らである。途中から焼成部と接する所までは緩やかなへこみ状を呈している。

船底状ビット 底面に平面形態が精巧に近い形をした粘土状のものが敷かれていた。範囲は70cm×100cm厚さ4cmを測り、青緑色で小砂利が含まれていた。検出状況から見て窯の構造物と思われる。

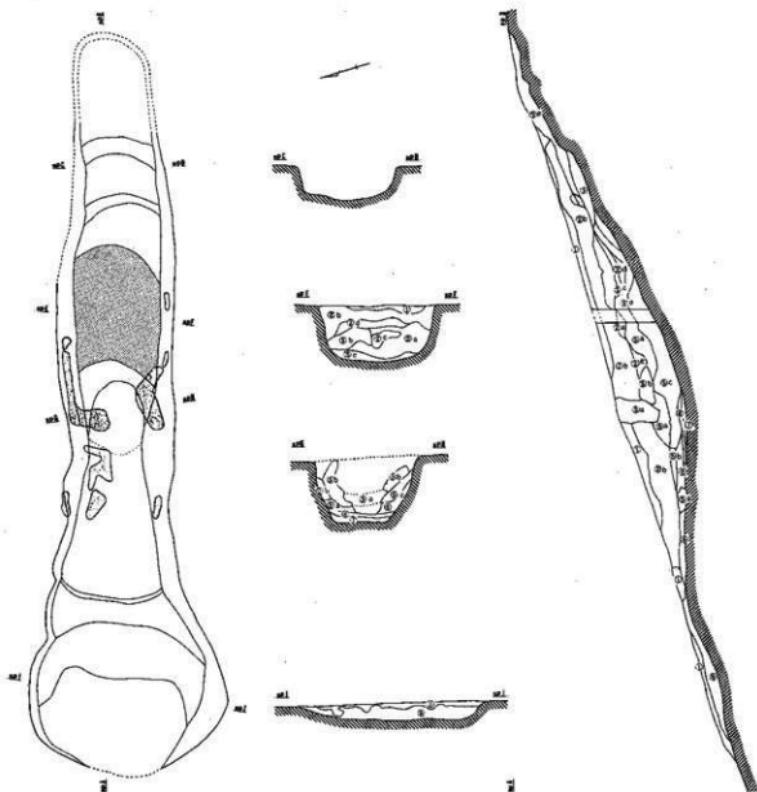
燃焼部 船底状ビット部分の底面壁面に砂礫層が露出する。燃焼部は礫層を掘り込んで築造されている。燃焼部の大きさは長さ366cm、たき口210cm、最短幅外殻部132cm、内殻部74cmを測る。

焼成部

奥壁を含む上側は消失している。平面図上の点線は焼土化した地山の存在する範囲を表す。

平面形態 外殻内殻共に燃焼部と接する部分から約160cmほどは一定幅で上に延びる。途中より緩やかに狭くなっている。

底面の状況 燃焼部と接する地点から上方へ長さ150cmにわたって赤茶褐色で堅くしまった部分を検出している。検出状況から床の遺在部分と見ている。

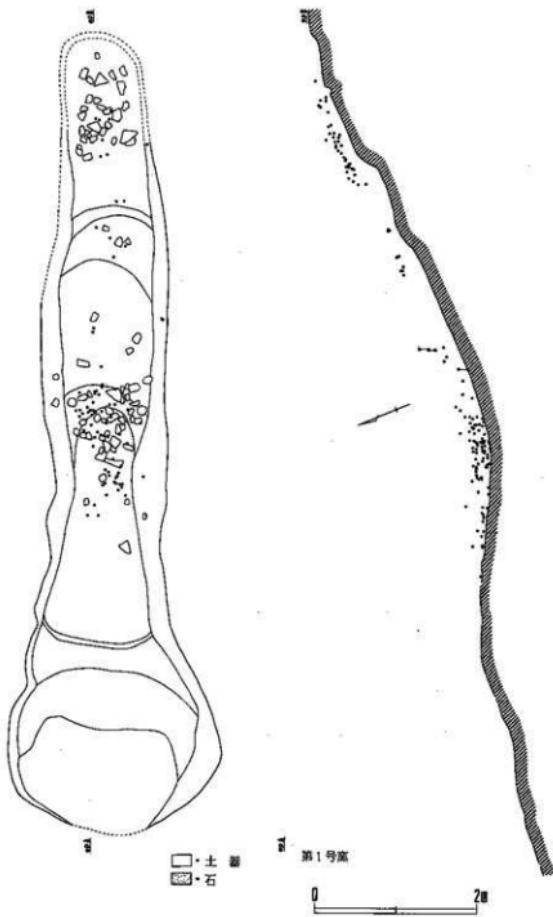


- ① 黄色褐色土 粒子細かくしまりのある砂質性土
 ② a 暗茶褐色土 粒子は細かく粘質を持つ砂質性土
 (窓体塊 須恵器片、焼土ブロックを含む)
 ② b 暗茶褐色土 粒子細かく②aより黒味が強い砂質性土
 (炭化物の粒、焼土の粒を含む)
 ② c 色、土質は②aと同じ、異物がほとんど含まれない
 ② d 黄褐色土 粒子細かく、粘質性を持ちしまりのある砂質土
 (熱を受け若干千燥化している、炭化物の粒、焼土塊を含む)
 ② e 暗茶褐色土 しまりがある粒子細かく粘質性を持つ砂質土
 (焼土塊、炭化物の粒を含む)
 ③ 赤茶褐色土 粒子細かく粘質を持つ砂質性土の焼土層
 (炭化物の粒を含む)
 ④ 青緑色の窓体 粘質のもろい性質
 ⑤ a 窓体ブロック層 窓体片を主体として黒茶褐色土が混る
 ⑤ b 窓体板状ブロック (窓体の大型片)
 ⑤ c 黒茶褐色土 粒子細かくしまりがない
 (窓体ブロック、焼土ブロック、須恵器片、炭化物粒が多くめだつ)
 ⑥ 黒茶褐色土 粒子細かくややしまりがある。粘質を若干持つ砂質性土
 (窓体ブロック塊、焼土塊粒、須恵器片、炭化物粒を含む)
 ⑦ 黒茶褐色砂利土 1~5cmの小レキと砂質土が黒く変色したもの
 (焼土の粒、炭化物の粒、須恵器片を多く含む)
- ※ ブロックは3cm以上のもの
 塊は1~3cmのもの
 粒は1cm以下のものを表現している。

第7図 第1号窓

床造在面より上側の底面に段状になっている所が見られた。地山の焼土化したものが露出していてややへこみ状になっていることから、床面が崩壊してできたものと見られる。

焼成部分の大きさは長さ433cm、最大幅150cm、最短幅110cmを測る。



第8図

第1号窯遺物出土状況

2 第2号窯 (SY-2)

位 置

B～D26グリット内に位置する。第1号窯の南西に平行して検出された。

方 向

主軸は、南東方向を向き、等高線に直交する。

土 層

①層～⑤層と⑥層は窯崩落時の堆積層。

⑦層、⑧層は窯崩落前の堆積層。

④層は窯体の板状破片を多く含んでいて、中には天井部の窯体がそのまま落下したような状況で検出された。

構 造

焼成部の半分を含む窯上側部分は消失している。現状で全長728cm。半地下式で無階段である。断面は船底状を呈する。

たき口前面

平面形態 たき口部分から八の字状に広がっている。底面は緩やかなへこみ状になり、全長142cm、最大幅142cmを測る。

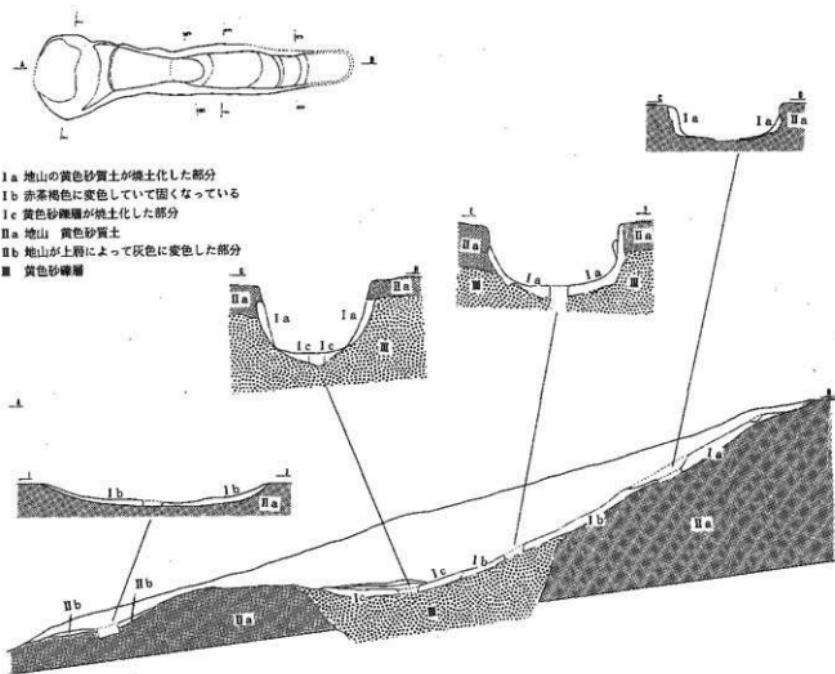
燃 烧 部

平面形態 外殻部分ではたき口部分が狭く、やや上側では広がりそのまま一定の幅で直線的に上に延びている。内側は橢円形の片方が三日月状に欠けたような形状で落ち込んでいる。

底面は、たき口部から緩やかなへこみ状になっている。大きさは全長130cm、たき口部分70cm、最大幅152cmを測る。

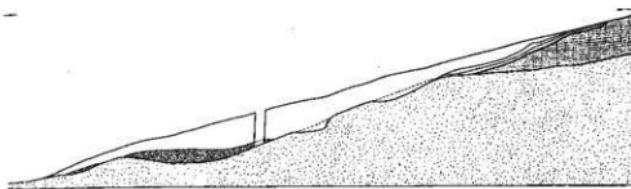
焼 成 部

上側部分は消失している。平

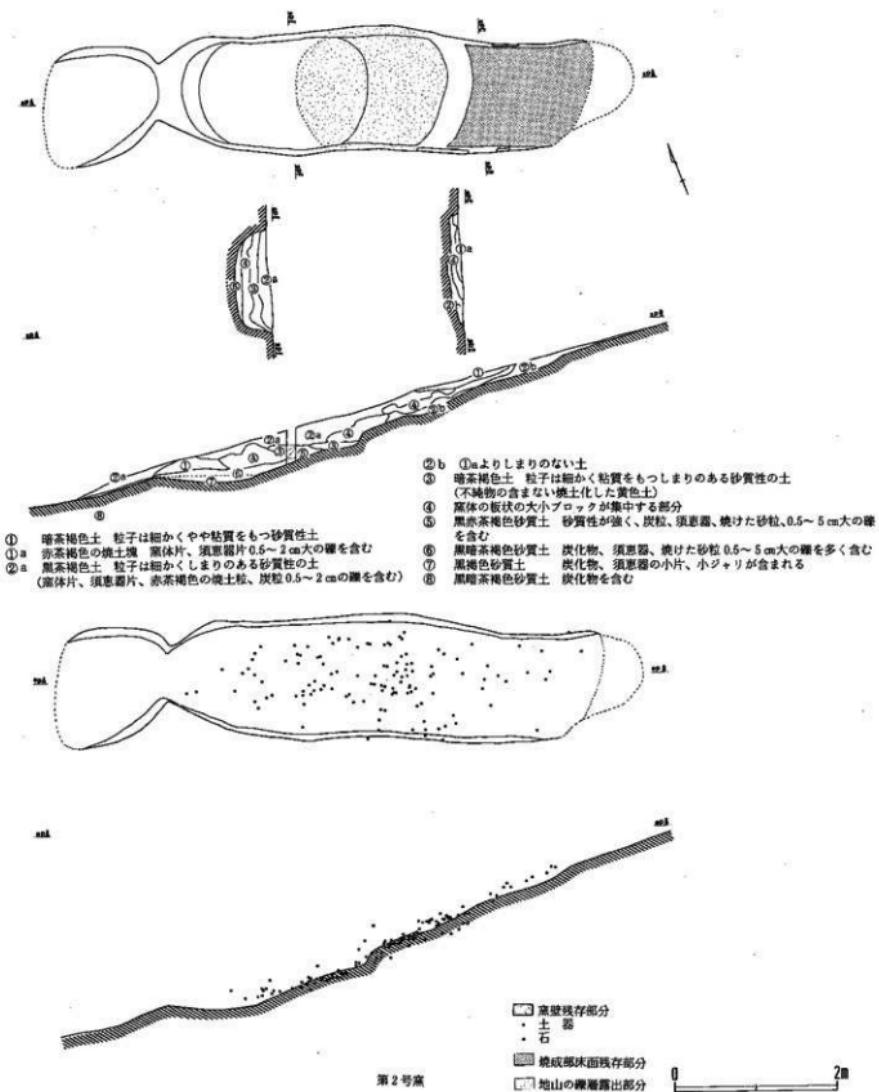


第9図 第1号窯模式図

I 硬質化した黄色砂質土
 II 赤茶褐色土(焼土)
 III 黄茶褐色土(地山)
 IV 砂疊層(地山)
 ■ 窯体崩落前の堆積層



第10図 第2号窯模式図



第11図 第2号窓

面図上の点線は焼土化した地山の残存する範囲をあらわしている。

焼成部床面の下側部分には、地山の礫層が露出している所が見られた。上側床面では黄色砂質土が硬質化していた。硬質化した黄色砂質土の下は、赤茶褐色に焼土化した地山の層が存在していた。以上のことから床の残存したものと考える。

焼成部上側の側壁下部に現位を保っている窯体が部分的に見られた。残存する大きさは全長465cm、最大幅154cmを測る。

窯 体

色は内側が白色で外側が黒茶色であり、全体的に軟質な窯体であった。酸化焰焼成状態であったのだろうか。

本窯のたき口部から焼成部下側は、南西から北東にかけて帯状にはしる礫層を掘り込んで造られている。窯の北東側側壁に沿って、10cm前後の礫が多く表面に露出していた。

3 第3号窯 (SY-3)

位 置

A～B32、B33グリット内に位置する。第2号窯から南西へ約20m離れていて、第2号窯より上方に位置している。

方 向

主軸は南東方向を向いている。等高線に直交する。

土 層

①層、②層は窯崩落時から崩落後にかけての堆積層。

③a、b層は窯崩落前から崩落時にかけての堆積層。

構 造

遺構の大半は調査区外に入り、検出できた部分は窯の下層面部分に留まる。検出された状況を一見すると、燃焼部分に見られる船底状ピットと同様の落ち込みが見られる。残存する窯外殻部と合わせてみると、形状的には燃焼部と考えられる。しかし底面には焼けた形跡が明確に見られない。結果として、

今回検出した遺構の遺存状況では、窯のどこの部分であるか限定することはできない。

平面形態 外殻は下に向かって緩やかに広がり、途中より八の字状に南方向へカーブを描くような形状をしている。

底面の状況は船底状を呈している。底面縦方向には段差が2ヶ所見られる。上段面、下段面、底面はほぼ平らである。窯検出部分の大きさは長さ175cm、幅80～172cmを測る。

4 第4号窯 (SY-4)

位 置

A、B33～34に位置し、調査区外南東方向へ伸びている。第3号窯の南西に平行して存在する。

方 向

主軸は南東方向を向いている。等高線に直交する。

土 層

①a、b層は窯崩落後に堆積したものである。①a、b層のうち、①a層は二次堆積層と見られる。

②層、③層は窯崩落時から崩落後にかけての堆積層である。

④層と⑤層は窯崩落前の堆積層である。

⑥層は窯側壁の窯体が残存していたものである。

構 造

遺構の大半は調査区外に入っていて、今回検出できたのは、たき口前面と燃焼部の一部のみであった。検出できた全長は356cmを測る。半地下式で断面は船底状を呈している。

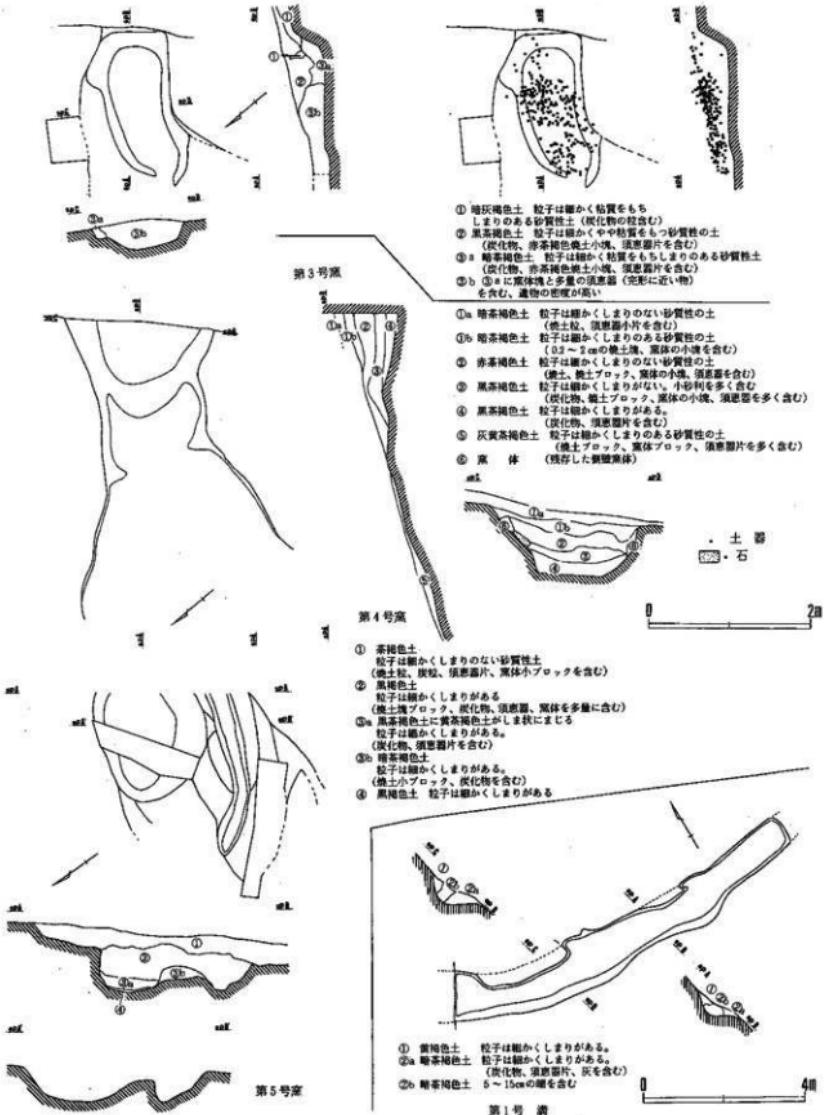
たき口前面

平面形態 たき口の所から八の字状に広がる。

底面は、窯の横方向のみわずかに緩やかなへこみ状になっていて、縦方向は自然の傾斜と平行する。たき口との境は緩やかに盛り上がったようになっている。大きさは全長160cm、最大幅は270cmを測る。

燃 燃 部

平面形態 たき口部分の内殻部分が狭くすぼまる。外殻のたき口側は直線的で、一定の幅で上に延び、少し上にいくと八の字状に広がる。



第12図

第3・4・5号窪、第1号溝

窓内には二つの落ち込みが見られる。たき口側の落ち込みは三日月状を呈し、その上側にある落ち込みは全形を知りえないが、検出できた形状は半円形を呈していた。落ち込みの底面状況は、たき口側は緩やかな浅いへこみ状になり、その上方のものは傾斜が緩やかではあるが深く落ち込んでいる。

大きさは検出できた部分で全長195cm、たき口部分の幅は外殻で140cm、内殻で80cm、最大幅168cmを測る。燃焼部の側壁部に、部分的であったが元位置を保った状況で窓体が検出されている。

平面図には記載できなかったが、セクション図には記載している。

5 第5号窓(SY-5)

位 置

A31、32グリッドに位置する。第3号窓の北東側に平行している。

方 向

主軸は南東方向を向いている。等高線に直交する。

土 層

①層は窓崩落後の二次的な堆積層。

②層は窓崩落時から崩落後にかけての堆積層

③a、b層は窓崩落前から崩落時にかけての堆積層

④層は窓崩落前の堆積層。

遺 構

遺構の大半は調査区外に入る。

検出された部分は、窓外殻部分と燃焼部と思われる落ち込みが2ヶ所見られた。落ち込みは切り合つていて、北東、南東側と区分した。南西側では溝状遺構も検出している。全体の大きさは長さ260cm、最大幅240cmを測る。半地下式と見られる。

北東側の落ち込みは、平面形態が寸づまりな橢円形を呈している。断面形態は船底状を呈している。底面の状況は熱を受けて固くなっていたが、直接熱を受けた形跡は見られなかった。大きさは検出できた全長が135cm、最大幅130cmを測る。

南西側の落ち込みの平面形態は、船底ピット状になっている。底面の状況は、浅く緩やかなへこみ状を呈している。底面に強く焼けた形跡は見られなかった。断面形態は船底状を呈している。大きさは全長238cm、最大幅110cmを測る。落ち込み中央には溝状遺構が見られた。南西側落ち込みに伴うものとして見ている。溝は全長208cm、幅20~28cm、深さ10cmを測る。南東方向から北方向へ緩やかに湾曲している。遺存状況は下面が部分的にかろうじて残存している状況であった。

2ヶ所の落ち込みはその形状や検出状況から燃焼部と判断した。結論として、第5号窓は二つの燃焼部が存在している。状況から見て窓の造り変えが考えられる。新旧関係は解っていない。

第3節 溝

1 第1号溝(SD-1)

位 置

D~F23、E~F24グリッドに位置する。第1号窓の北下側に位置する。調査区外へ更に延びる。

方 向

東から北西方向へ延びている。

形 状

平面形態 東から北西方向へ緩やかに湾曲している。

断面形態 緩やかな皿状を呈している。

全長930cm、幅80~124cm、深さ24cmを測る。

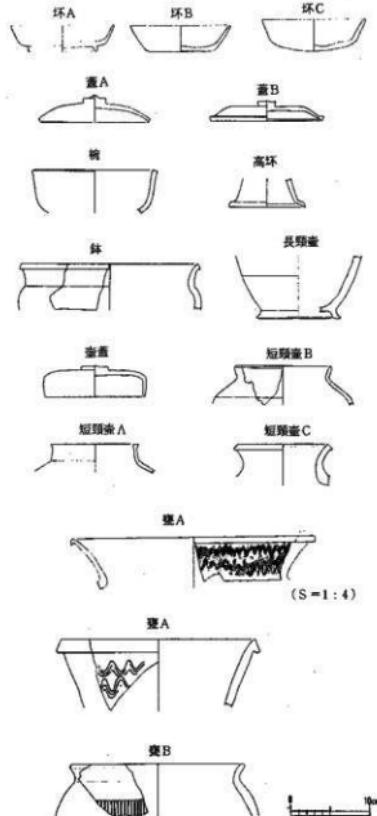
第3章 遺 物

第1節 器種分類

今回の発掘調査による出土土器をつきのように分類した。

分類については、1997「高丘丘陵古窯址群の須恵器生産について」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘

調査報告書13—小布施町内・中野市内その1・その2-』(財)長野県埋蔵文化財センターの分類を参考に行った。



第13図

器種分類

- 环
A 有台のもの。
B 無台で平底のもの。
C 無台で丸底のもの。
- 蓋
A 宝珠形、擬宝珠形のツマミを有し、口縁端部の断面が三角形を呈する蓋。
B 宝珠形、擬宝珠形のツマミを有し、口縁内側に返しがある蓋。
- 梗
高梗
短脚のもの。
- 体
高体
広口で頸部がくびれ、頸部下に最大径があるもの。
- 长颈壺
体部が卵型に膨らむ長頸のもの。
- 壺蓋
短頸壺Aとセットになる蓋。
- 短頸壺A
口頸部が直立する短頸のもの。壺蓋とセットになる。
- B 広口で頸分が「く」字状に屈曲し、体部的最大径と口径の大きさが近い短頸のもの。
- C 口縁部で外反し折り返しなく開く小型のもの。
- 壺
A 口頸部の長い壺。口縁部がラッパ状に開くもの。
B 口頸部が短く、口径の大きい広口の壺。

第2節 各 説

1号窯 (SY-01) 出土遺物

蓋 A (第14図1~7)

口縁部の折り目の稜が明瞭なものが多く、比較的天井部が高いものである。口径は13cmから17cmまで様々であり、ツマミの形状・大きさに違いが見られるが、ほぼ同形態である。3は赤こげ茶色を呈している。

壺 蓋 (第14図8)

短頸壺Aの蓋である。ツマミが擬宝珠形で天井部は平らであり、口縁部がやや内湾する形態である。

壺 A (第14図9、10)

底部はほぼ平らであり、器体全体にナデ調整が施されている。10は器高が低く箱型を呈している。

2号窯 (SY-02) 出土遺物

蓋 A (第14図11~23)

口縁部の折り目の稜が明瞭なものが多く、天井部がやや高く口径15cm前後のもの (12、14、15)、天井部が高く口径17cm前後のもの (13、16)、天井部が低く偏平なもの (17~19、21、口径15cm前後)、天井部が低く口径の小さいもの (11、20、22、23、口径13.5cm前後) の4種類に大別できる。13、16は器高の高い比較的大型の壺A (24、25) とセットになる蓋と思われる。11、14~23は赤こげ茶色もしくは赤茶色を呈している。

壺 A (第14図24、25)

底部は平らであり、底部から壺腰部にかけて丸みをもつ。器全体にナデ調整が施されている。器高が高くほぼ同形態である。

壺 B (第14図26、27)

底部は平らであり、器全体にナデ調整が施されている。26は切離し後丁寧なナデ調整が施されている。26、27は口径差はあるがほぼ同形態であり、赤茶色を呈している。

甕 A (第14図28~30)

28、29は太めの沈線文と櫛描波状文の組み合わせで頸部文様帯が構成されている。全体の形態は不明である。30は甕底部であり、タタキ調整が行われている。

3号窯 (SY-03) 出土遺物

蓋 A (第15図31~35)

口縁部の折り目の稜が明瞭なもの多く、天井部がやや高く口径14cm前後のもの (32、33) と天井部が低く偏平なもの (31、34、35、口径14cm前後) に別けられる。

壺 A (第15図36~46)

底部は平らであり、底部から壺腰部にかけて丸みを持つ。器体全体にナデ調整が施され、器高4.1cm前後口径12.5cm前後、器高4.1cm前後口径13.0cm前後、器高4.3cm前後口径14.0cm前後の3種類に大別できる。外傾の強い底径の小さなものの (36、38、39、41) や、箱型に近いもの (45) もみられる。

壺 B (第15図47~85)

底部は平らであり、器体全体にナデ調整が施されている。切離し後ナデ調整が施されているが、ヘラ切り跡を残したものが多い。口径12.2~14.4cm、器高3.5~4.3cmで、若干口径の小さいもの (55、59、62、69、78、79) もみられるがほぼ同形態である。53、67、74、82は赤茶色を呈している。

甕 A (第16図86~89)

86、87は頸部が無文で短めの甕である。88、89は櫛描波状文で頸部文様帯が構成され、88はさらに櫛描押し引き文が組み合わされ、口唇部が楓葉状の断面を呈している。全体の形態は不明である。

4号窯 (SY-04) 出土遺物

蓋 A (第16図90~94)

口縁部の折り目の稜が明瞭なもの多く、天井部がやや高く口径15cm前後のもの (90、91、94) と天井部が低く偏平なもの (92、93、口径14cm前後) に別けられる。

壺 A (第16図95)

底部は平らであり、底部から坏腰部にかけて丸みを持つ。器体全体にナデ調整が施され、底部はヘラ削りされている。口径11.8cm器高3.8cmで、他の窯のものと比較して小型である。

坏 B (第16図96)

底部は平らであり、器体全体にナデ調整が施され、切離し後丁寧なナデ調整が施されている。器形は他の窯のものとほぼ同形態である。

短頸壺C (第16図97)

頸部が無文で短めの小型の壺である。全体の形態は不明である。

壺 A (第16図99、101)

99は2本の櫛描波状文の組み合わせで頸部文様帶が構成されている。101は頸部が無文である。縦長の壺と思われるが全体の形態は不明である。

壺 B (第16図98、100、102)

頸部が無文の広口の壺と思われるが全体の形態は不明である。99、102は同じ道具によるものと思われるタキ目があり、100はナデ調整が施されている。

5号窯 (S Y - 0 5) 出土遺物

蓋 A (第17図103~112)

口縁部の折り目の稜が明瞭なものが多く、口径14cm前後の比較的天井部のやや高いものである。天井部の偏平なものが多いが、109は口径12.8cmと小型である。106、109、111、112は赤こげ茶色もしくは赤茶色を呈している。

蓋 B (第17図113)

口縁部の折り目の稜が明瞭であり、天井部がやや高いものである。口縁部内側に返しと思われるものがみられる。

坏 A (第17図114~122)

底部は平らであり、底部から坏腰部にかけて丸みを持つ。器高6.1cm口径12.8cmのもの(114)、器高3.3cm口径14.4cmで箱型のもの(115)、器高3.3cm前後口径12.8cm前後、器高3.9cm前後口径13.0cm前後の4種類に大別できる。器体全体にナデ調整が

施され、底部はヘラ削りされている。116、118、122は赤茶色を呈している。

坏 B (第17図123~126)

底部は平らであり、器体内側及び側面にナデ調整が施され、底面切離し後ヘラ削りされたもの(123、124、口径13.8cm前後)と未調整のもの(125、126、口径12.3cm前後)に別けられる。器形は他の窯のものとほぼ同形態である。

坏 C (第17図127)

底部は丸みを帯び、器体内側及び側面にナデ調整が施され、底面切離し後ナデ調整が施されている。口径12.2cmでやや小型である。

壺 A (第17図128)

3本の櫛描波状文の組み合わせで頸部文様帶が構成され、口縁部内側が受け口状を呈している。全体の形態は不明である。

グリッド出土遺物

蓋 A (第17図129~132)

口縁部の折り目の稜が明瞭で、129~131は口径14cm前後で天井部が低く偏平なものである。

坏 A (第17図133~143)

底部は平らであり、底部から坏腰部にかけて丸みを持つ。器高6.2cm前後口径18.0cm前後のもの、器高3.3cm前後口径14.0cmのもの、器高4.0cm前後口径12.0cm前後のもの、器高4.0cm口径13.7cmのものの4種類に大別できる。器体内側及び側面にナデ調整が施され、底面切離し後ヘラ削りされたものと未調整のものに別けられる。135はやや箱型を呈している。137、143は赤茶色を呈している。

坏 B (第17図144~147)

底部は平らであり、器体内側及び側面にナデ調整が施され、底面切離し後ナデ調整が施されている。146は底部に糸切り跡が残る。145は口径12.6cmでやや小型である。器形は他の窯のものとほぼ同形態である。

坏 C (第17図148、第18図149)

底部は丸みを帯び、器体内側及び側面にナデ調整

が施され、底面切離し後ナデ調整が施されている。 いる。

器高に若干の違いがあるがほぼ同形態である。

椀（第18図150）

体部を内湾させる椀で、底部を欠損する。口縁端部が平らに調整されている。

高环の脚部（第18図151）

短脚の高环の脚部と思われる。

鉢（第18図152）

口径部から体部上部にかけて「S」字状に屈曲する浅鉢型の鉢と思われるが、全体の形態は不明である。

長頸壺（第18図153）

底部の破片である。口頸部及び体部上部を欠損するが、卵型の体部を有するものと思われる。体部中央はナデ調整を、底部に近い部分はヘラ削り調整が施されている。

壺 蓋（第17図133、134）

短頸壺Aの蓋である。ツマミを欠損する。

短頸壺A（第18図154）

口頸部が直立する短頸壺の口縁部の破片であり、全体の形態は不明である。頸部に文様は無く、口縁端部が平らに調整されている。

短頸壺B（第18図155、156）

広口で頸部が「く」字状に屈曲し体部の最大径と口径の大きさが近い短頸の壺の口頸部の破片である。全体の形態は不明である。頸部は無文で、ナデ調整が施されている。

短頸壺C（第18図157～162）

頸部が無文で短めの小型の壺の口頸部の破片であり、全体の形態は不明である。157は口縁端部が未調整であるが、他のものは平らに調整されている。

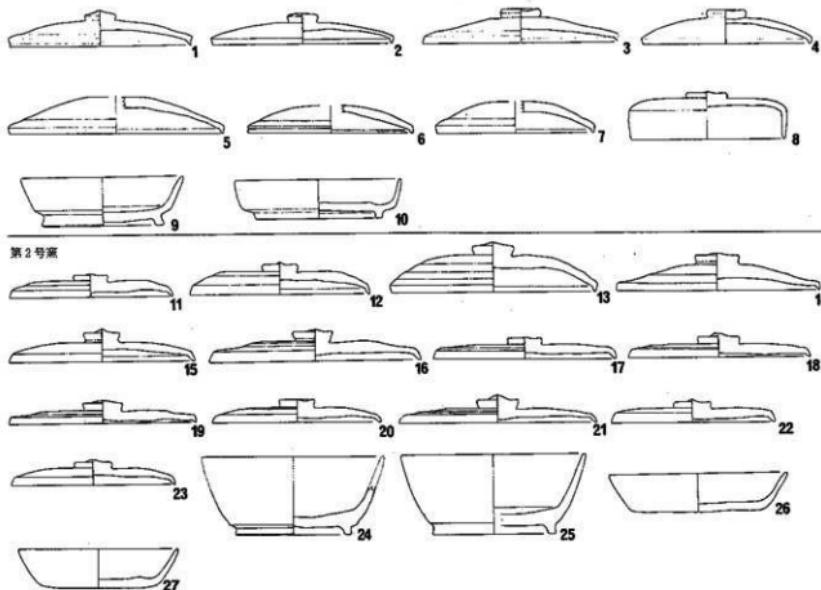
甕 A（第18図163～165）

164、165は櫛描波状文の組み合わせで頸部文様帯が構成されている。164は口縁部内側がやや受け口状になっている。全体の形態は不明である。

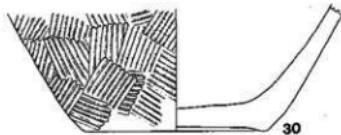
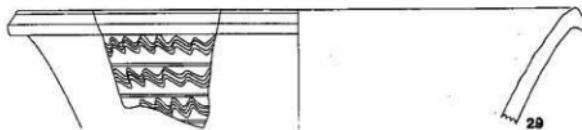
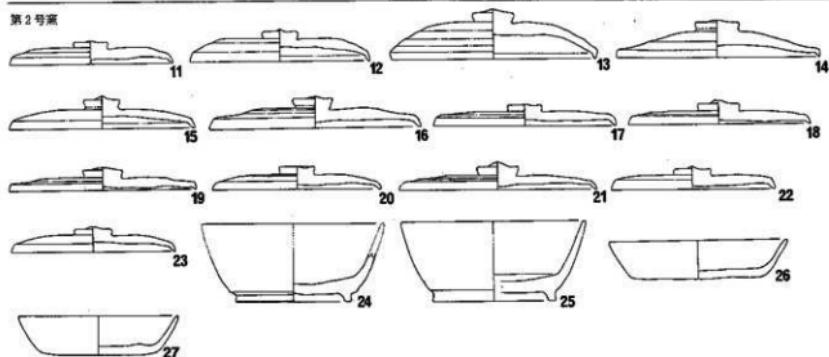
甕 B（第18図166、167）

広口の甕の口頸部の破片であり全体の形態は不明である。頸部に文様は無く、ナデ調整が施されて

第1号窯



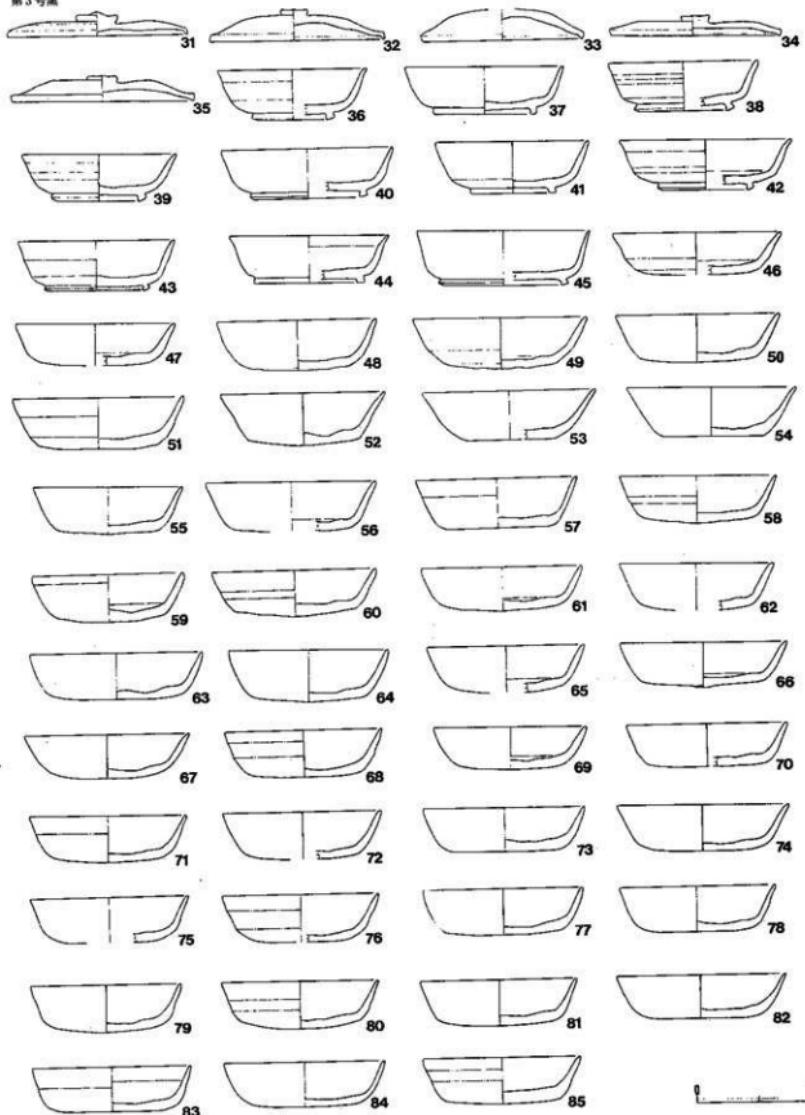
第2号窯



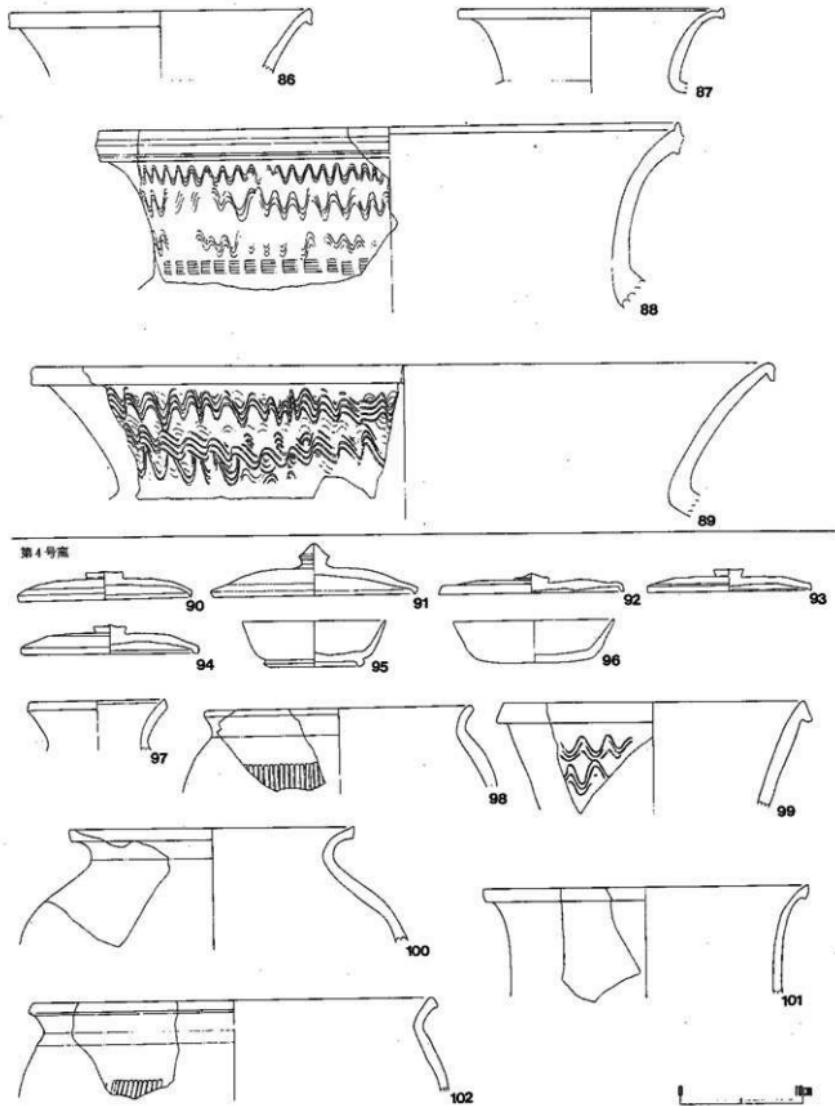
10mm

第14図 遺物(1)

第3号窓

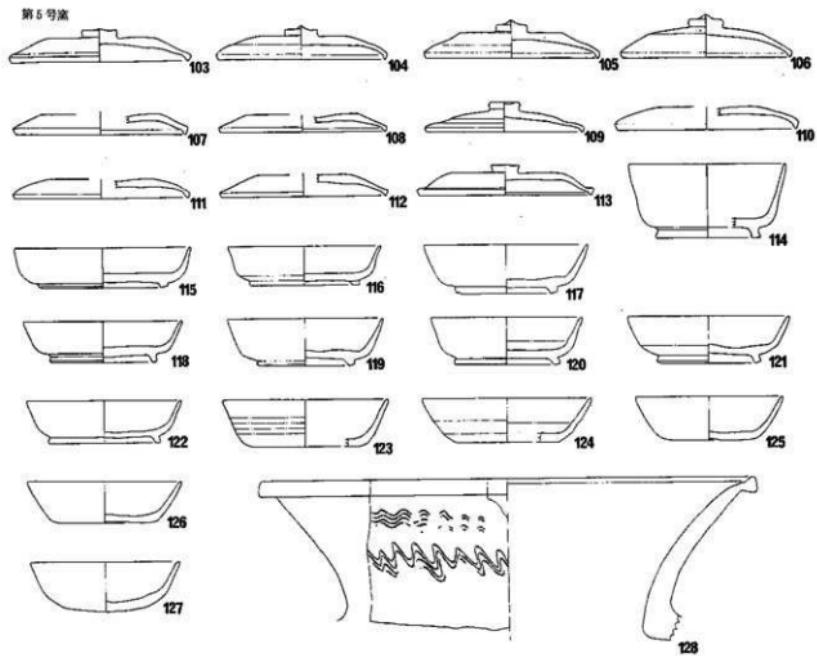


第15図 遺物(2)

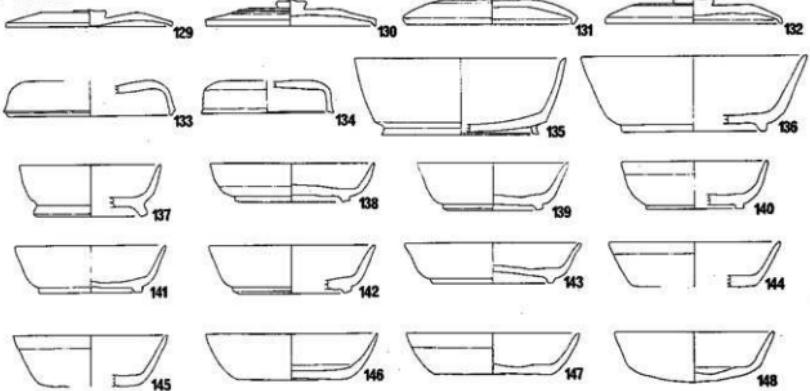


第16図 遺物(3)

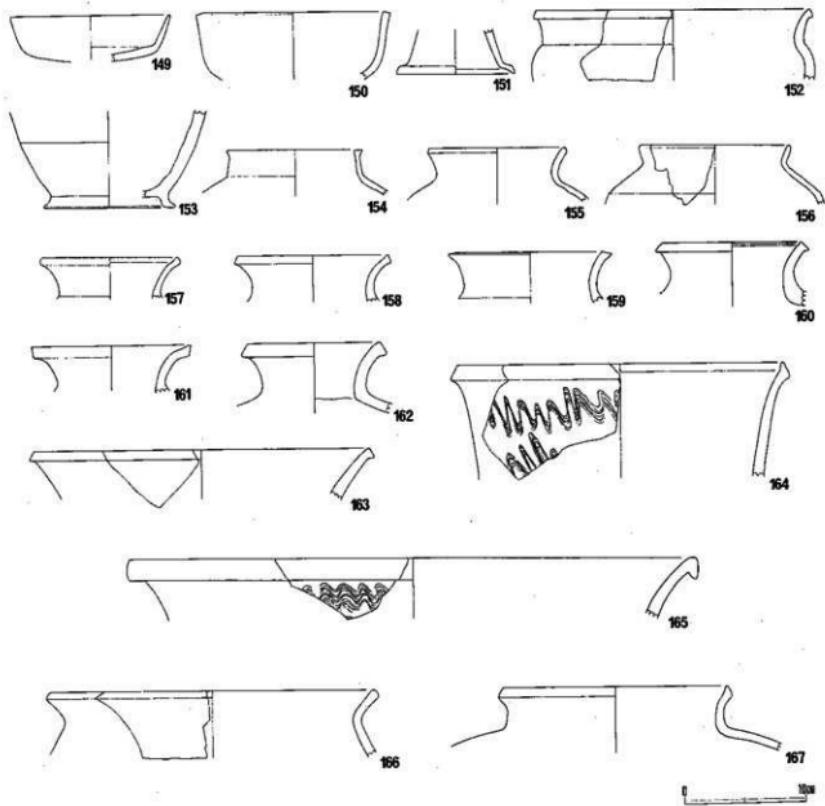
第5号窯



グリッド出土



第17図 遺物(4)



第18図 遺物(5)

遺物観察表

蓋 A

遺構名	図版No.	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整方法	備考
SY-01	1	15.0		2.1	回転ヘラケズリ調整	
	2	14.6		1.8	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	
	3	16.1		2.1	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	赤こげ茶色
	4	13.6		2.2	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	
	5	17.4		3.0	ヨコナデ調整	
	6	13.6		2.1	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	
	7	13.0		2.6	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	
SY-02	11	13.4		1.3	天井部下まで回転ヘラケズリ調整	赤茶色
	12	14.6		1.8	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	
	13	17.0		3.0	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	赤茶色
	14	16.6		2.1	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	
	15	15.1		1.6	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	赤茶色
	16	17.4		1.7	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	赤こげ茶色
	17	15.0		1.2	天井部下まで回転ヘラケズリ調整	
	18	14.8		1.1	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	赤茶色
	19	15.2		1.1	天井部上面回転ヘラケズリ調整	赤こげ茶色
	20	13.8		1.2	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	赤茶色
	21	16.2		1.2	天井部下まで回転ヘラケズリ調整	赤茶色
	22	13.4		1.2	天井部下まで回転ヘラケズリ調整	赤茶色
	23	13.4		1.4	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	赤茶色
SY-03	31	14.5		1.6	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	
	32	14.4		2.1	ヨコナデ調整	
	33	13.1		2.6	ヨコナデ調整	
	34	13.4		1.2	天井部上面回転ヘラケズリ調整	
	35	14.8		1.8	天井部上面回転ヘラケズリ調整	
SY-04	90	14.0		1.7	天井部下まで回転ヘラケズリ調整	
	91	16.6		2.2	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	
	92	15.2		1.1	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	
	93	13.4		1.2	ヨコナデ調整	
	94	14.6		1.7	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	
SY-05	103	14.4		2.0	天井部上面回転ヘラケズリ調整	
	104	13.8		1.9	天井部上面回転ヘラケズリ調整	
	105	14.1		2.1	ヨコナデ調整	
	106	13.8		2.4	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	赤茶色
	107	13.8		1.7	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	
	108	13.5		1.4	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	
	109	12.8		1.7	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	赤こげ茶色
	110	14.6		1.9	回転ヘラケズリ調整	
	111	14.2		1.7	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	赤こげ茶色
	112	13.5		1.9	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	赤こげ茶色
	129	13.5		1.2	天井部上面回転ヘラケズリ調整	
	130	14.0		1.4	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	
	131	14.8		1.2	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	
	132	14.4		2.0	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	

蓋 B

遺構名	図版No	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整方法	備考
SY-05	113	14.2		1.9	天井部中ほどまで回転ヘラケズリ調整	

壺 A

遺構名	図版No	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整方法	備考
SY-01	9	13.3	10.0	4.0	ヨコナデ調整	箱型
	10	13.6	10.1	3.2	底部ヘラオコシ後ナデ調整	箱型 ヘソケズリあり
SY-02	24	15.2	10.1	6.6	ヨコナデ調整	
	25	15.0	9.0	6.5	底部ヘラオコシ後ナデ調整	ヘソケズリあり
SY-03	36	12.3	6.8	4.2	底部ヘラオコシ後ナデ調整	
	37	13.0	8.5	3.9	底部ヘラオコシ後ナデ調整	ヘソケズリあり
	38	12.2	8.4	4.0	底部ヘラオコシ調整	
	39	12.6	7.7	3.9	底部ヘラオコシ後ナデ調整	ヘソケズリあり
	40	14.2	9.7	4.1	底部ヘラオコシ後ナデ調整	
	41	12.6	7.0	4.3	ヨコナデ調整	
SY-04	42	14.0	7.8	4.2	底部ヘラオコシ後ナデ調整	
	43	12.8	8.0	4.1	底部ヘラオコシ後ナデ調整	ヘソケズリあり
	44	13.2	9.1	3.9	底部ヘラオコシ後ナデ調整	
	45	14.2	10.6	4.5	底部ヘラオコシ後ナデ調整	箱型 ヘソケズリあり
	46	13.8	8.3	3.5	底部回転ヘラケズリ調整	赤紫色
	95	11.8	7.6	3.8	底部ヘラオコシ調整	ヘソケズリあり
SY-05	114	12.8	8.5	6.1	ヨコナデ調整	
	115	14.4	9.6	3.3	底部ヘラオコシ調整	箱型 ヘソケズリあり
	116	12.6	8.9	3.2	底部ヘラオコシ調整	赤茶色 ヘソケズリあり
	117	13.5	8.2	4.0	底部ヘラオコシ後ナデ調整	ヘソケズリあり
	118	13.0	8.4	3.4	底部ヘラオコシ調整	赤茶色 ヘソケズリあり
	119	12.8	8.0	3.9	底部ヘラオコシ後ナデ調整	ヘソケズリあり
	120	12.4	8.2	3.9	底部ヘラオコシ後ナデ調整	ヘソケズリあり
	121	13.2	7.6	3.9	底部ヘラオコシ調整	ヘソケズリあり
	122	12.6	9.0	3.4	底部ヘラオコシ後ナデ調整	赤茶色 ヘソケズリあり
	135	17.4	12.8	6.3	底部回転ヘラケズリ調整	箱型
グリッド出土	136	18.5	11.8	6.2	ヨコナデ調整	
	137	11.6	9.3	4.2	ヨコナデ調整	赤茶色
	138	13.5	9.1	3.2	底部ヘラオコシ後ナデ調整	ヘソケズリあり
	139	12.4	8.8	3.9	ヨコナデ調整	
	140	12.0	8.0	3.9	底部ヘラオコシ調整	
	141	12.3	8.3	3.9	底部ヘラオコシ調整	ヘソケズリあり
	142	13.7	9.8	4.0	ヨコナデ調整	
	143	14.6	10.0	3.3	ヨコナデ調整	赤茶色

注：ヘソケズリとは、ヘラオコシ後底部に残った切取り跡をヘラでけずったもので、底部全体をけずる
ヘラケズリとは区別した。

环 B

遺構名	図版No.	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整方法	備考
SY-02	26	14.6	11.0	3.2	ヨコナデ調整	赤茶色
	27	13.0	9.0	3.2	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	赤茶色
SY-03	47	13.0	9.0	3.5	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	48	13.2	8.0	4.1	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	49	14.4	9.0	4.2	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	50	13.4	9.3	4.0	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	51	14.0	9.6	4.2	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	52	13.5	9.2	4.3	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	53	14.3	7.5	4.0	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	薄茶色
	54	13.8	8.0	3.9	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	55	12.2	8.4	3.9	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	56	14.1	9.5	4.1	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	57	13.2	9.9	4.1	底部ヘラオコシ調整	
	58	12.8	9.0	3.9	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	59	12.4	9.0	3.9	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	60	13.6	10.0	3.8	底部ヘラオコシ調整	
	61	13.2	9.4	3.6	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	62	12.6	9.0	3.9	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	63	14.2	10.2	3.8	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	64	13.2	9.8	4.3	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	65	13.0	9.0	3.8	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	66	13.6	9.8	3.7	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	67	13.5	9.0	3.5	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	68	13.0	9.4	3.8	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	69	12.6	8.0	3.6	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	70	14.1	9.4	3.5	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	71	12.8	9.1	3.8	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	72	13.1	9.5	3.9	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	73	13.4	8.9	3.6	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	74	14.0	8.1	3.8	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	赤茶色
	75	12.9	7.0	3.7	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	76	13.0	10.0	3.9	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	77	13.1	9.4	3.8	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	78	12.6	8.2	3.7	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	79	12.2	8.0	3.9	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	80	13.0	10.4	3.9	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	81	13.0	9.6	3.8	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	82	13.8	9.8	3.6	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	明茶色
	83	13.0	8.0	3.7	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	84	13.3	8.8	3.7	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	85	13.0	8.0	3.9	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
SY-04	96	13.1	9.7	3.5	ヨコナデ調整	
SY-05	123	13.6	8.6	3.9	底部手持ちヘラケズリ調整	
	124	14.0	8.4	3.6	底部手持ちヘラケズリ調整	赤こげ茶色
	125	12.0	6.3	3.6	底部ヘラオコシ調整	

环 B

遺構名	図版No	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整方法	備考
SY-05	126	12.6	7.6	3.4	底部ヘラオコシ調整	
グリッド出土	144	14.0	10.0	3.7	ヨコナデ調整	
	145	12.6	8.4	4.2	ヨコナデ調整	
	146	14.1	8.4	3.8	底部糸切り跡	
	147	14.2	9.6	3.4	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	

环 C

遺構名	図版No	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整方法	備考
SY-05	127	12.2		4.1	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	こげ茶色
グリッド出土	148	13.0		4.2	底部ヘラオコシ後ヨコナデ調整	
	149	13.0		3.9	ヨコナデ調整	

椀

遺構名	図版No	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整方法	備考
グリッド出土	150	15.8			ヨコナデ調整	

高坏

遺構名	図版No	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整方法	備考
グリッド出土	151		9.8		ヨコナデ調整	

鉢

遺構名	図版No	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整方法	備考
グリッド出土	152	22.6			ヨコナデ調整	

長頸壺

遺構名	図版No	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整方法	備考
グリッド出土	153		10.7		体部中央ヨコナデ調整、底部付近回転ヘラケズリ調整	

壺 蓋

遺構名	図版No	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整方法	備考
SY-01	8	12.5		3.4	天井部上面回転ヘラケズリ調整	
グリッド出土	133	13.7		2.9	ヨコナデ調整	
	134	11.0		2.7	ヨコナデ調整	

短頸壺A

造構名	図版№	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整方法	備考
グリッド出土	154	11.0			口縁部内側ヨコナデ調整、外側自然釉?	頸部文様なし

短頸壺B

造構名	図版№	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整方法	備考
グリッド出土	155	11.1			口縁部内外ヨコナデ調整	頸部文様なし
	156	12.4			口縁部内外ヨコナデ調整	頸部文様なし

短頸壺C

造構名	図版№	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整方法	備考
SY-04	97	11.0			口縁部内外ヨコナデ調整、口縁部調整	頸部文様なし
グリッド出土	157	11.4			口縁部内外ヨコナデ調整、口縁部未調整	頸部文様なし
	158	12.5			口縁部内外ヨコナデ調整、口縁部調整	頸部文様なし
	159	13.4			口縁部内外ヨコナデ調整、口縁部調整	頸部文様なし
	160	11.8			口縁部内外ヨコナデ調整、口縁部調整	頸部文様なし
	161	13.0			口縁部内外ヨコナデ調整、口縁部調整	頸部文様なし
	162	11.3			表面汚れ毀損のため不明、口縁部調整	頸部文様なし

壺 A

造構名	図版№	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整方法	備考
SY-02	28	50.0			口縁部内外ヨコナデ調整、口縁部折り返し	太めの沈線文と波状沈線文
	29	35.2			口縁部内外ヨコナデ調整、口縁部折り返し	太めの沈線文と波状沈線文
	30		14.8		タタキ目	赤茶色
SY-03	86	24.6			口縁部内外ヨコナデ調整、口縁部折り返し	頸部文様なし
	87	21.8			口縁部内外ヨコナデ調整、口縁部ツマミ調整	頸部文様なし
	88	47.4			口縁部内外ヨコナデ調整、口縁部折り返し、口唇部楕葉状に調整	波状沈線文と柳描押し引き文
	89	60.8			口縁部内外ヨコナデ調整、口縁部折り返し	波状沈線文
SY-04	99	24.6			口縁部自然釉?、口縁部折り返し	頸部文様なし
	101	26.6			口縁部自然釉?、口縁部折り返し	波状沈線文
SY-05	128	40.4			口縁部内外ヨコナデ調整、口縁部折り返し	波状沈線文
グリッド出土	163	27.4			口縁部内外ヨコナデ調整、口縁部折り返し	頸部文様なし
	164	27.4			口縁部内外ヨコナデ調整、口縁部折り返し	波状沈線文
	165	47.2			口縁部内外ヨコナデ調整、口縁部折り返し	波状沈線文

壺 B

造構名	図版№	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整方法	備考
SY-04	98	21.8			口縁部内外ヨコナデ調整、体部タタキ調整	頸部文様なし
	100	23.2			口縁部内外ヨコナデ調整、体部ナデ調整し	頸部文様なし
	102	32.8			口縁部内外ヨコナデ調整、体部タタキ調整	頸部文様なし

壺 B

遺構名	図版№	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整方法	備考
グリッド出土	166	26.9			口縁部内外ヨコナデ調整	頸部文様なし
	167	18.8			口縁部内外自然丸？	頸部文様なし

写 真 図 版

PL 1



千曲川対岸より調査区を望む

PL 2



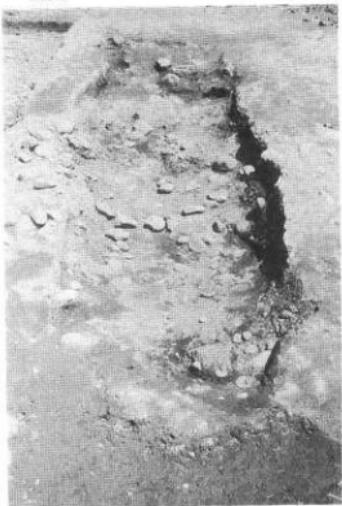
第2号窯 遺物出土状況

PL 3



第2号窯 遺物出土状況

PL 4



第2号窑 完 坠

PL 5



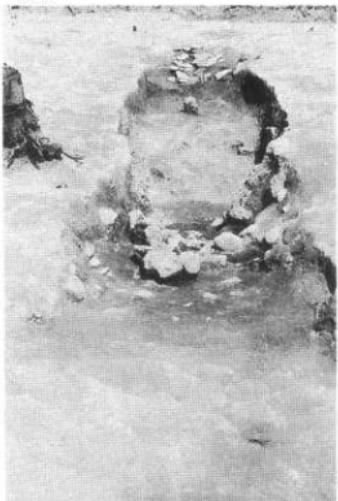
第1号窑 遗物出土状况

PL 6



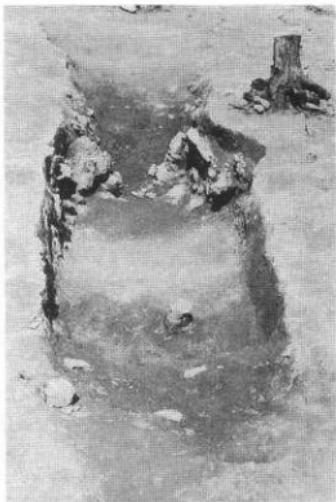
第1号窑 窑体残存状况

PL 7



第1号窯 遺物出土状況

PL 8



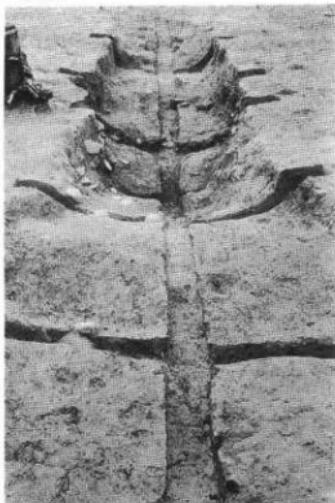
第1号窯（上方より）

PL 9



第1号窯 完 壊

PL10



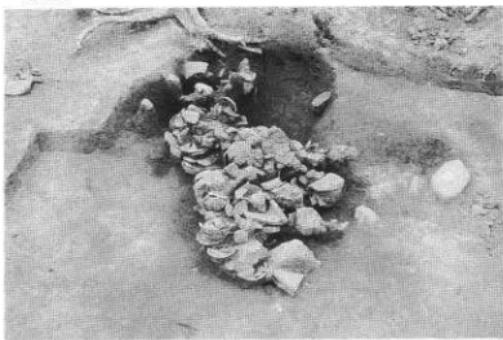
第1号窯

PL11



手前より第5、3、4号窯

PL12



第3号窯 遺物出土状況

PL13



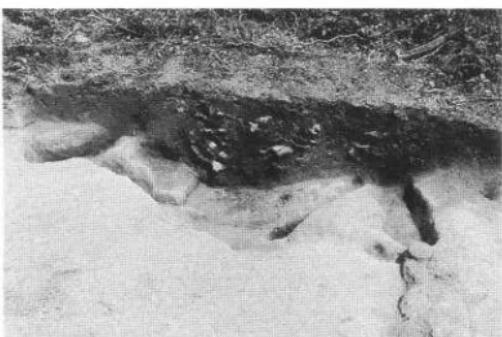
第3号窯

PL14



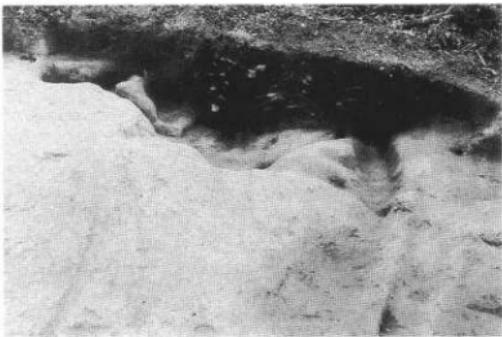
第4号窯

PL15



第5号窯 遺物出土状況

PL16



第5号窯

PL17



第1号溝

牛出窯跡遺跡発掘調査報告書

印 刷 平成10年3月20日

発 行 日 平成10年3月20日

編集・発行 中野市教育委員会

中野市三好町1-3-19

印 刷 所 恒 栄 印 刷

